

慣れていく怖さ

イラク報道から

イラクに派遣されている自衛隊に関する報道が続いていますが、このところ何とも言えない不安を感じています。立派なひげを蓄えた先遣隊の隊長がサマワの人たちからイラク人のような日本人だと言われたと素敵な笑顔で記者に語っているところが報道され、そして、陸上自衛隊の隊長がこれまたニコやかに現地言葉で挨拶するところが報道されました。

振り返ってみると、イラクへの空爆が始まったとき、報道はアメリカなどの態度を批判し、その後、自衛隊派遣に疑問を呈するものが多かったのではないのでしょうか。いまはどうでしょうか。イラクはいまだ不穏な空気に包まれている様子が連日報じられる一方で、先に挙げたように自衛隊の隊長の「さわやかで紳士的な」活動ぶりが報じられています。

いまだに大量殺戮破壊兵器が発見されないなか、そもそもこの戦争は何なのかということへの関心が薄れてきているように思います。国会での議論がアメリカを支持するのから自衛隊派遣問題に移ったとき、いつのまにかサマワは戦闘地域かどうかとか自衛隊の装備はどうするのかなどといった目先の細かい議論に時間を割き、報道もそれを大きく取り上げていました。その結果、私たちの目は戦争のものより自衛隊に向けられていったようにおもいます。そして、自衛隊に関心が集まるなか、多くの反対意見を無視して派遣された自衛隊を追う報道のはじまりは戦争の悲惨さを感じさせないものでした。自衛隊としてもここが重要な宣伝ポイントであると心得て、そういった視点でこの任務の顔となる隊長を選んでいるのでしょうか。その後も笑顔のさわやかな指揮官(一佐)が派遣されています。そうならば、見事に的中したと言えるでしょう。先の隊長に、すくなくとも、イヤな感じを持った人はほとんどいなかったのではないのでしょうか。ここでは「自衛隊員=いい人」の図式が刷り込まれたようにおもいます。実際の一人ひとりの自衛隊員の人格は別の話として、こ

ういったことの積み重ねが、自衛隊自体の存在に疑問を持たなくなっていくようにおもえてなりません。そして、いつのまにか多くの人々が「自衛隊？あってもいいんじゃない。」「自衛隊は戦争しないでしょ。」「自衛隊は役に立っているからいいんじゃない。」などと思い始めるのでしょうか。

皇室報道から

戦後、昭和天皇の時代には、天皇の戦争責任や天皇制の是非についての報道がたびたびあった記憶があります。平成になってからはどうでしょうか。皇族の婚姻・子の誕生についての報道が多く、昭和天皇のときのような報道姿勢はほとんど感じられなくなっているとおもいませんか。とりわけ、無邪気な笑顔を見せる皇族のこどもたちに焦点を当てた特番や特集はたびたび目につきます。だれもがその映像に微笑ましさを感じ、皇族の親子の姿に親しみを感じるのではないのでしょうか。

実際にお目にかかれれば皇族の方々は皆親しみやすい人たちなのでしょうが、そういった個々人の人格に関する実際の話とは別の話として、ここでもまた「皇族=いい人」図式が刷り込まれて、皇室(天皇制)のイメージアップにつながっているように思えます。今、天皇制や天皇に戦後の昭和時代にみられたような批判的意見またはマイナスのイメージを持つ人はどれほどいるのでしょうか。戦争体験者が年々少なくなってきたことも影響しているのかもしれませんが、少なからぬ人々が「皇室があってもいいんじゃない」と思っているのではないのでしょうか。公明党からも女帝容認発言が出たりしていますよね。(いまのまま男子が誕生しないと天皇制自然消滅なんてことが起こってしまう)

思考停止へ

これらに共通することは、視覚を通して感情に訴えるイメージの繰り返しです。これは私たちの弱い部分を突いているように思います。人は情報

の80%を目から得ていると言われていますが、その目を通して心に響く映像を見たとき、多くの人の場合、頭のなかを支配するのは論理的思考ではなく感情的反応ではないでしょうか。しかも、つねに同じイメージを繰り返し見ているといつの間にかそのイメージが固定化され、それが自明の理となっているのではないのでしょうか。ここで得られた自明の「理」は論理的思考を経ずして得られた理であって、ほんらいの意味での理ではないのです。そして、このようなことを繰り返していると、いずれは論理的な思考そのものができなくなり、思考停止状態に陥るようで不安です。

このようなことが感情への強い刺激を感じるようなかたちで行われるならば、おそらく多くの人は抵抗感を感じたり反発したりすることでしょう。しかし、弱い刺激のかたちで小出しに繰り返されると徐々に慣れていき、いきなり言われれば反発したであろうことも受け入れてしまうのではないのでしょうか。感情的に受け入れ共感し、それが頭のなかで自明の理となったとき、その「理」を否定するような論理的な説明は、じつはそれが合理的なものであっても、ほとんどの場合、屁理屈であるとか机上の空論だとして門前払いされることが多いように感じます。

思考停止状態に陥ったり論理的思考(説明)を拒絶する人が多くなると、いったいどんな社会になるのか、何か空恐ろしさを感じます。自衛隊も天皇制も戦後ずっと、大きな問題となっていたはずなのに...

最後に一言

今回は報道非難のためにいろいろ言っているではありません。もちろん、マスメディアには報道の効果への検証と自ら思考停止に陥らないよう考えて頂きたいものです。ただ、重要なことは、私たち自身もできるだけ多くの角度からものを見るよう日頃から心掛けることだと思います。近時日本でも注目されてきたメディアリテラシーというものも同じことを言っているものだと思います。一言で言えば、情報を読みとる力を育てようということです。

それともうひとつ重要なことは、感情に支配されないようにすることです。私たちが何かを考えると、何らかの感情がそのきっかけとなることは

よくあることです。しかし、熱くなるのは目の高さまでにしてしまおう。そこから上、すなわち脳はつねにクールに保ちましよう。

人の温もりを感じつつも感情に流されずに論理的思考を経て合理的判断を下すことは、私たちが子どもたちに身につけてもらいたいと願っていることではないでしょうか。私たち大人が身をもって示すことが一番の教育方法だと思います。

亀山憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者
(犯罪学・刑事法)]